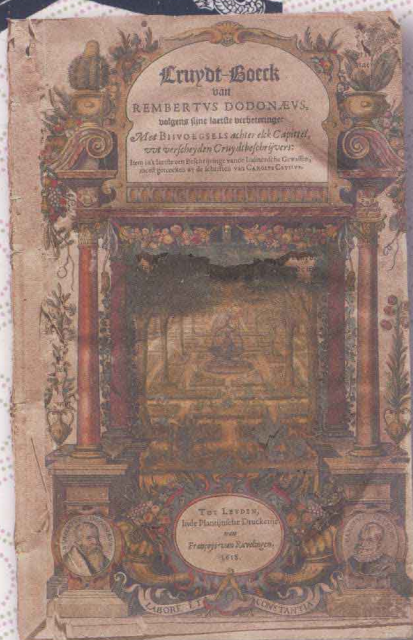
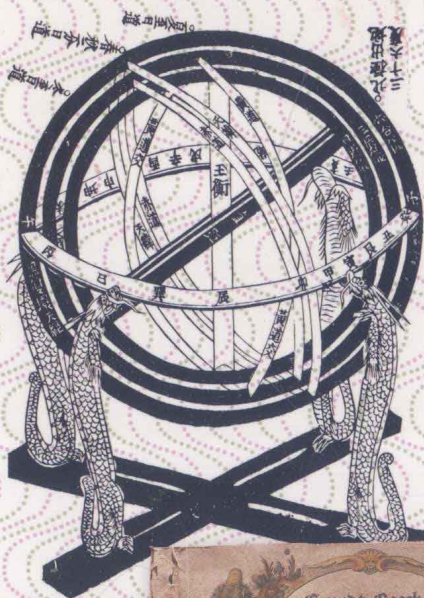


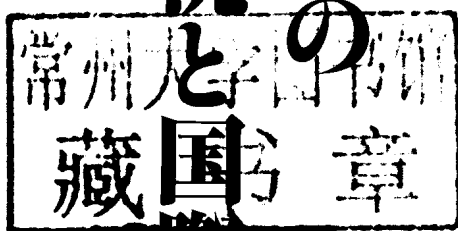
一八世紀日本の 文化状況と国際環境

衛玉璫



笠谷和比古編

一八世紀日本の
文化状況と国際環境



笠谷和比古編

思文閣出版

じゅうはっせいきにほん おんかじょうきょう こくさいかんきょう
一八世紀日本の文化状況と国際環境

2011(平成23)年8月1日発行

定価：本体8,500円(税別)

編者 笠谷和比古

発行者 田中周二

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 重細重印刷株式会社
製本

© Printed in Japan ISBN978-4-7842-1580-5 C3021

まえがき——一八世紀日本をめぐる研究課題とその意義——

一八世紀は豊穡の世紀である。世界のいずれの地を見ても、内容豊かにして個性に溢れ、そして歴史的にも重要な役割を果たすことになる文化状況が形成されていた。

西欧世界においては、ジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明とそれにもなう産業革命が進み、近代資本主義システムが勃興しつつあった。政治哲学の分野では、自然法理論と啓蒙主義哲学の盛行が市民革命と近代市民社会の形成を惹起していた。音楽芸術の分野においても、教会音楽であり貴族層の娯楽的芸術でもあったバロック、ロココの古典的音楽はベートーヴェンによって集大成されるとともに、近代市民社会の音楽として確立されていた。このように一八世紀は西欧社会では近代市民社会形成の胎動期にあたっており、その文化的動向に対しては多方面から研究が行われてきた。

東アジアにおいても一八世紀は、やはり豊かな稔りに満ちた時代であった。中国では清朝の体制は安定し、康熙・雍正・乾隆の三大皇帝による安定的治世と、一連の国家的規模でなされた典籍編纂事業、地誌編纂事業をとおして文運は隆盛をきわめていた。李氏朝鮮においても朱子学が全盛時代を迎えており、ことに中国が満洲族による支配を受けていたことから、李氏朝鮮は自ら中華文明の正統な後継者をもって任じ、朱子学を基軸とする儒教文化が同国の両班官僚層たちによって最も純粹な形で展開されていた。

そして日本もまた、すでに百年を経過しつつあった持続的平和の中で、この一八世紀という時代は、社会のさ

さまざまな場面において独自性に充ち満ちた文化的発展を見せていた。社会経済活動の分野では、大坂を中心とする全国的な経済ネットワークが形成され、全国規模での商品生産・流通が展開されるとともに、中央市場である大坂では世界に先駆ける形で、証券市場、先物取引のシステムが形成され、経済活動の飛躍的な発展をもたらしていた。

政治の分野では公共性理念をめぐる政治思想の面において顕著な進化が見られ、一方では行政的統治システムの精緻な構築、他方では「国家・人民のための君主」という国王機関説的な政治理論の普及、という世界のトップレベルを行く思想的内容を示しつつあった。学問の分野では、儒者の荻生徂徠が古文辞学を唱えて朱子学批判を行うとともに文献学の実証主義の方法論を確立することによって、それ以降の学術的諸分野における近代的・科学的な思惟の成長の基礎を形成した。

また徳川吉宗の享保改革において推進された一連の国家的プロジェクト——薬種国産化政策、全国物産総合調査、全国的人口調査、等々——は、一方では物産開発のための実用的な経済学を、他方では自然に対する観察力を精緻化する博物学の発達をうながしていたが、それらの活動はそれまでの幕府・諸藩という封建的分立割拠の状態を超えた日本列島全体を対象とする事業として展開されたが故に、それは政治形態としての統一的国民国家を志向するものとなっている。

この他にも文学・芸術の分野、文楽・歌舞伎といった舞台芸術の分野などまで含めて、日本の一八世紀は豪華絢爛たる文化的内容を誇っている。そしてそれは当然にも、次の世紀の明治維新から始まる本格的近代化にとつて、それが成功裡に発展していくための基礎的諸条件を形成していたといえることができるであろう。

日本のこのような一八世紀の文化的状況はいかにして形成されたか、それらは東アジア世界、また西洋世界までふくめたグローバルな環境の下で、どのような影響を受けつつ、あるいはまた独自の創造性を発揮しつつ、さ

まざまな様相を呈していたか。そして欧米世界以外では、なぜ日本だけが一九世紀のうちに独自に近代化を達成することに成功したのか。

本書はこれらの問題意識の下、専門各分野の研究者を集め三か年にわたって運営された国際日本文化研究センター（日文研）における共同研究会の成果報告論集である。

共同研究会の概要については巻末の一覧に示したとおりであるが、いずれの報告も充実した内容を備えており、討論は白熱を帯びて止むことがなかった。そのような中であつてただ残念であつたのは、この共同研究会における主要なメンバーであり、編者の長年にわたる知己であつたヘルベルト・プルチョウ先生を急性の病で喪つてしまったことである。先生は一八世紀日本の新たな状況を啓蒙の概念で捉えるべきことを提唱され、また「日本人による日本の発見」がこの世紀における最も重要な文化的事象であることを指摘されていた。もとよりそれらの問題は、今回の共同研究会の核心的な課題をなしており、この共同研究会における先生の役割はこのうえなく重要であつた。

このような先生を喪つた悲しみは深く覆いがたいものがあるけれども致し方のないこともある。いまはただ、共同研究会の成果である本書を先生の霊前に捧げてその御冥福をお祈りするばかりである。

二〇一一年五月一〇日

編 者

一八世紀日本の文化状況と国際環境◆目次

まえがき——一八世紀日本をめぐる研究課題とその意義——

序論 一八世紀日本の「知」的革命 Intellectual Revolution	笠谷和比古	3
--	-------	---

I 思潮

江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見	宮崎修多	33
太宰春臺における古文の「體」「法」重視	竹村英二	59
——古文辞「習熟」論に鑑みて——		
一八世紀日本の新思潮——国学と蘭学の成立——	前田 勉	81
蘭方医が受容した一八世紀の西洋医療	クレインス、フレデリック	103
——治療法の根拠と理論展開——		
昌益とシェリング——その自然と医の思想——	松山 壽一	121
享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入	和田 光俊	149

漢訳西洋暦算書と『天学雑録』……………	小林龍彦
---------------------	------

—— 精円軌道論と物体の落下法則の受容をめぐって ——

II 経済と社会

一八世紀新興問屋商人の広域的活動とネットワーク……………	長谷川成一
------------------------------	-------

—— 津輕領・足羽次郎三郎の活躍 ——

東北日本における家の歴史人口学的分析……………	平井晶子
-------------------------	------

—— 一八・一九世紀の人口変動に着目して ——

江戸書物問屋の仲間株について——出版界の秩序化……………	藤實久美子
------------------------------	-------

江戸時代の日本人は日本をどう発見したか……………	ブルチョウ、ヘルベルト
--------------------------	-------------

III 文化の諸相

熊沢蕃山の楽思想と一八世紀への影響……………	武内恵美子
------------------------	-------

一八世紀のいけ花——「たて花」「立花」「抛入」の相関を通して……………	小林善帆
-------------------------------------	------

大嘗会再興と庶民の意識……………	森田登代子
------------------	-------

一八世紀における武術文化の再編成——社会的背景とその影響……………	魚住孝至
-----------------------------------	------

享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承	郡司 健	393
--------------------------	------	-----

——江戸中期の大砲技術の展開——

IV 国際交流

歌舞伎と琉球・中国	武井 協三	419
琉球の中国貿易と輸入品——海を越えた唐紙——	真栄平房昭	439
一八世紀朝鮮国の儒学界とそれがみた日本の儒学	平木 實	457
ソウルに伝えられた江戸文人の詩文——東アジア学芸共和国への助走——	高橋 博巳	491
一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容	岩下 哲典	511
引き継がれた外交儀礼——朝鮮通信使から米国総領事へ——	佐野真由子	535

共同研究会開催一覧

執筆者紹介

一八世紀日本の文化状況と国際環境

序 論 一八世紀日本の「知」的革命 Intellectual Revolution

笠谷和比古

はじめに

日本の一八世紀社会は、その各種分野において豊潤な果実を生み出しつつあった。ことに学術や新しい「知」の動向に見るべきものが少なくなかった。

儒学の分野では、東アジアの主流学説であつた朱子学を圧倒する勢いをもつて、古典儒教への回帰を主張する古学が台頭し、山鹿素行、伊藤仁斎を経て荻生徂徠の登場をもつて一世を風靡するにいたる。これら儒学の古代回帰の動向に刺激される形で、日本古代の神ながらの道を究明することを目的とした国学もまた隆盛を迎える。

このように古の聖人の道や、神々の道を探究する宗教道徳的な学問が盛んになる一方、他方では、もつと現世・現実在即した実用を旨とする学問も発達した。薬の開発を目指す本草学、より広く日本国内の有用物を探查して産業化しようとする物産学・経済学が誕生するとともに、自然をあるがままに捉え、そこに棲む動植物や魚貝類を精密に描写し記述していく自然誌ナチュラリストリとしての博物学、そしてヨーロッパの学術的成果を直接に導入する蘭学が勃興することとなる。

これら一八世紀の日本社会に継起的に登場する諸学問や「知」のあり方は、当然にも徳川時代の日本人と日本社会の文明的な発展をもたらし、日本の近代化にとって少なからぬ役割を果たしたであろうことが推測される。実際、一八世紀の時代におけるこのような「知」の前進と広範な分野にわたる展開が見られなかったとしたら、明治期以降の日本の近代化は果たして実現しえていたかについて深い疑義を抱かざるをえないのである。

その意味において一八世紀の日本社会の中で生起し、展開していた「知」の新しい動向の意義は重要であろう。そしてそれは、「知」の革命と呼んでも決して過言ではないような意義を有していたように思われる。

それでは、これらの「知」的営為はどのようにして生起し、そしてどのような内的論理をもって相互に結びつきながら発展し、「知」の革命と呼ぶにふさわしいような豊穡な果実を生み出していったのか、その動向を跡づけてみたい。

一 儒学の新動向と実証主義的分析法の形成

一八世紀日本の新しい「知」の動向を考えようとするとき、まずもって検討されなければならないのが儒学の世界の動向であり、東アジア世界の主流学説であった朱子学に対して、日本で湧き起こった古典儒学への復帰を唱える古学派の思想内容であろう。一七世紀半ばにおける山鹿素行に始まり、伊藤仁斎によって発展せしめられ、そして荻生徂徠において完成を見る知的動向である。⁽¹⁾

この古学派儒学、ことに荻生徂徠によって古文辞学として方法的に確立される徂徠学の重要性については、数多くの先学たちによって指摘されているところであるが、ここでもこの徂徠学の問題から検討をはじめることとしたい。

徂徠は朱子学者として出発したが、朱子学の観念的性格、主観的内省に問題を帰してしまう態度に疑問を覚え、

儒学の本来は礼楽刑政の具体的な制度を明らかにして、経世済民の実をあげることにあるはずであるとした。

もとより経世済民を標榜することは朱子学と同様であるが、それを為政者の道徳的陶冶によっておのずから実現されていくとする朱子学の立場に対して、徂徠学のアプローチは古代の聖人が定めた礼楽刑政の理想的な制度を解明把握し、これを社会に施行することによって治国・安民を実現していくとするとその独自性があつた。⁽²⁾

後述する八代將軍の徳川吉宗も徂徠に関心を示し、しばしば召出してその意見を求めた。徂徠の政治上の献策は、彼の晩年の著述である『政談³⁾』の中に集約されている。徂徠の献策の内容は多分に復古調のもので、社会の現状を受け入れつつ改革を構想する吉宗の施策には必ずしも反映されるものではなかったが、徂徠学の基本をなす制度主義的な統治構想は吉宗の考えとよく合致し、吉宗の政治のあり方に大きな影響を及ぼしている。

徂徠学の近代思想形成過程における意義を、その思想内容ではなく、思维様式の中に求めるべきであるとしたのは、周知の丸山真男の議論である。⁽⁴⁾すなわち丸山は、徂徠の立論体系をもつて、朱子学的な天地宇宙から個人の内面道徳までを統一的に捉えようとする「連統的思维」を否定するものとして、また朱子学の自然の理法に基づく秩序観に対して政治行為における「作為」の論理を対置させることによって、個人道徳とは次元を異にする「政治の領域の独自性」を明確化したものとして位置づけた。

このような丸山の著名なシェーマをめぐっては、そもそも朱子学的儒学が支配的イデオロギーとして徳川社会に広く浸透していたとする丸山的前提に疑義ありとする批判論など、⁽⁵⁾賛否の論が長きにわたって繰り広げられてきたことも人のよく知るところであるが、ここでは徂徠学の歴史的意義について、いま少し別の観点から検討してみたい。

すなわち、徂徠が自己の学想的構想の正しさと古代中国の聖人、先王の立てた礼楽刑政の道を明らかにするため

に導入した古文辞学という方法の意義に即して考えてみる。聖人・先王の道を正しく理解するとは、聖人・先王の行跡、言明を記した古典である六経の文章、語句文言を正しく読解することに他ならない。徂徠の古文辞学の方法は、古典の字義理解には近文をもつてしてはならず、古典の記された時代の字義に即してこれを行わなければならないとするところにある⁽⁶⁾（この方法が徂徠の高弟太宰春臺にいたって方法的に体系化される点については本書所収の竹村論文を参照）。

徂徠の方法は古典の字義理解には、古典と同時代に著された当該字句を含む文例を数多く集め、そこから帰納的に字義を導き出すというもので、これは今日の文献学においても用いられている実証主義的な研究方法⁽⁷⁾に他ならないであろう。

この徂徠の古文辞学は古典の字義解釈において、従前とは比べものにならない効果と威力とを発揮することとなった。こうして徂徠の学派は儒学古典の理解において、朱子学や自余の諸派に対して圧倒的な優位に立つとともに、文芸の分野においても漢唐時代の中国古体の調子・語法に則った詩文を自在に表現しえたことから、徂徠学は一世を風靡するにいたった（この問題については本書所収の宮崎論文を参照）。

徂徠の学はこうして学術的な「知」の発展において大きな意義を発揮したのであるが、反面、徂徠その人の思考は多分に保守的なものであり、中国古代の聖人・先王の行跡をひたすら尊崇していたことから、そこには聖人信仰の雰囲気すらたどっていた。徂徠学の目的は、古文辞学の手法を用いて古典である六経を精密に読み解き、そこに記されている聖人の制作にかかる礼楽刑政の制度を明らかにするところにあつたが、同時に、これを導入するならば人間社会における矛盾や問題はおのずから解決されるであろうとする楽天主義が、そこには伏在していた。

はたまた当時の武家社会が直面していた財政窮乏などの問題に対しても、武士土着論といった近世創設期の社

会状態への回帰を唱えるばかりであつて、当時の貨幣経済、商品経済の高度な発達という社会経済的状况を踏まえて、社会の近代化へ向けた途を切り拓いていくような契機をその学問に見出すことは困難であつた。

ここに徂徠学の限界があつた。しかしながら徂徠の古文辞学が確立した実証主義の認識方法それ自体は依然として強力であり、有効であつた。徂徠学以降における日本一八世紀の「知」的動向は、いわば徂徠学の方法をもつて徂徠学を乗り越えていくところにあつたといふことができるかも知れない。

二 古方派医学の役割

徂徠学の意義は重要に違ひないけれども、一八世紀日本における「知」の進展が「知」的革命 Intellectual Revolution と称しうるほどに画期的であるとするならば、徂徠的認識をより掘り下げながら、しかもこれをラディカルに突破していく契機が必要である。そしてその歴史的な役割は、医学の分野における古方派医学（古医方）が担うこととなつた。

医学の分野において陰陽五行論、五運六気説などを駆使した金元代以降の思弁的な医学を否定して、漢代の古典医学に復古すべきことを最初に提唱したのは、京都の医師名古屋玄医（一六二八―九六）であつた。名古屋玄医の活動は徂徠の時代に先行していることから、彼はむしろ伊藤仁斎の古義学の影響の下に、このような復古思想を唱えるにいたつたものであらう。⁽⁹⁾

玄医について古医方の代表者と目されるのが後藤良山（一六五九―一七三三）である。彼は江戸に生まれ、のち京都に移り住んだが、荻生徂徠の活躍した時期に江戸にあつたことから、彼の唱えた復古論は徂徠学に導かれてのものであると捉えることができる。⁽¹⁰⁾

名古屋玄医や後藤良山らが古医方の聖典の如くに掲げたのは、漢代の張仲景（張機）が著した『傷寒論』であ

り、これは感染症などの疾病を中心として、その処方について事実在即して詳細に記した全一〇巻からなる医書である。艮山らが張仲景の『傷寒論』をことさらに重んじて、疾病治療法の基準としたことは、徂徠学派において六経を重んじ古代聖人が建てた礼楽刑政の制度を実現することをもって経世済民の所以としたのと軌を一にしている。このように後藤艮山の古医方とは、畢竟、徂徠学の医学版といった趣のものであった。

しかしながら、これをラディカルに突破しようとする人物が登場してくる。播州姫路の出身で京都において活動した医師香川修庵（名は修徳。一六八三—一七五五）である。⁽¹¹⁾彼ははじめ伊藤仁斎の門下に入って儒学を修め、そこで仁の道の実践の観点から医学を身につけることの必要性を感得し、後藤艮山について古医方を考究した。彼は儒学と医学は二つにして一つという信念をもっており、みづから「一本堂」と号した。

彼の医学理論はその著『一本堂行余医言』序文⁽¹²⁾および『一本堂薬選』例言⁽¹³⁾に見ることができる。修庵は玄医や艮山と同様に、陰陽五行論などを用いて薬効を規定し治療を論ずる金元以降の後世派医学を空理空論、有害な虚妄の説として退けるのであるが、彼の重要性はそこからさらに進んで、古医方が聖典視していた張仲景『傷寒論』をも、これら空論の影響をまぬかれ得ぬものとして相対化してしまうところにあった。⁽¹⁴⁾

たしかに修庵も、張仲景の『傷寒論』については「古今医人中之翹楚、無復出其右者」（『一本堂行余医言』）と述べて、同書の傑出した意義は高く評価するのであるが、それであっても同書には古代の『素問』に由来する陰陽五行流の思弁的な議論が混入しており、これを一大遺憾と断じている（「惜乎、其論全出于素問、不免混乎陰陽者流、且有二二謬妄也、吁得非千載一大遺憾乎哉」）。

まして自余の書物は邪説、空論に墮したものであり、「上下古今二千年來、未嘗見一人一書可祖述憲章者」と古典の權威をことごとく否定しさってしまう。そして、それらに代わって「一本ノ宗旨」を発明するにいたったとする。